

第2章 「学校楽しいーと」の概要と本県における実態調査結果

1 「学校楽しいーと」の概要

(1) 「学校楽しいーと」とは

「学校楽しいーと」^{*)}は、児童生徒理解を深める一方法で、学校における適応感を把握するためのものである。鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター並びに学校教員養成課程心理学専修の先生方の助言を頂き、予備調査を実施し、質問項目の精選を図った質問紙である。同じ質問項目、内容、質問数で、児童生徒の発達段階に応じて4種類を作成した。質問は以下の6観点、各4問に「いじめに関する項目」2問を加えた合計26問で構成されている。

【質問紙の種類】	【6観点】
小学1～3年生用	友達との関係（4問） 自己肯定感（4問）
小学4～6年生用	教師との関係（4問） 心身の状態（4問）
中学生用	学習意欲（4問） 学級集団における適応感（4問）
高校生用	いじめに関する項目（2問） 《合計26問》

「学校楽しいーと」の特徴は、次のとおりである。

統計分析の手法を用いた妥当性・信頼性のある質問紙である。
 短時間で簡単に入力、集計ができ、即結果が得られ、指導・援助に生かしやすい。
 個票のレーダーチャートにより、児童生徒の状態を視覚的に把握することができる。
 集団の状態と個人の状態を県の平均と比較して見ることができる。
 観点別の結果を基に迅速に教育相談を実施するなど指導・援助に生かしやすい。

(2) 児童生徒の回答の仕方と教師の処理

図3は、「学校楽しいーと」を実施する際の教師と児童生徒の作業の流れを示したものである。児童生徒40人が回答してから教師がその結果を入力、出力するまでおよそ1時間で終了する。

「学校楽しいーと」を配布した後、必ず実施の目的について説明をしてから、児童生徒に回答させる。

児童生徒の回答・記入

児童生徒が「学校楽しいーと」に回答するときには、各質問に対して1から4の選択肢の中から一つを選択する（図4）。小学1、2年生では、教師が1問ずつゆっくりと読み上げながら回答させることが望ましい。質問の意味が理解できない児童に対しては、具体的に説明しても構わない。未記入の箇所がないことを確認して回収する。

原則として、数値が高いほど望ましい状態とした。また、質問の回答結果が、直後

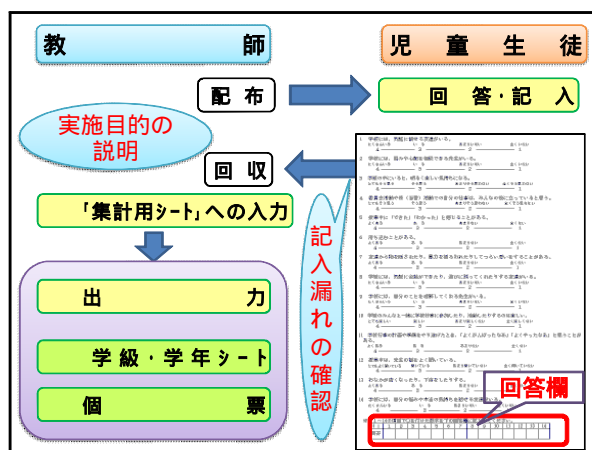


図3 「学校楽しいーと」実施時の作業の流れ図

6 観点	質問内容	4	3	2	1
友達との関係	1 学校には、気軽に話せる友達がいる。 たくさんいる いる あまりいない 全くいない	4	3	2	1
教師との関係	2 学校には、悩みや心配を相談できる先生がいる。 たくさんいる いる あまりいない 全くいない	4	3	2	1
学級集団における適応感	3 学級の中にとると、明るく楽しい気持ちになる。 とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない	4	3	2	1
自己肯定感	4 委員会活動や係（当番）活動での自分の仕事は、みんなの役に立っていると思う。 とてもそう思う そう思う あまりそう思わない 全くそう思わない	4	3	2	1
学習意欲	5 授業中に「できた」「わかった」と感じることもある。 よくある ある あまりない 全くない	4	3	2	1
心身の状態	6 落ち込むことがある。 よくある ある あまりない 全くない	4	3	2	1

図4 「学校楽しいーと」の質問紙

*1) 「学校楽しいーと」：鹿児島県総合教育センターWebページ（トップページ>カリキュラム>生徒指導）からダウンロードできる。

個票

児童生徒の個々の状態を把握する個票も、レーダーチャートで表示され、6観点のバランス、数値の高低、学級平均との比較が容易に把握できるようになっている。

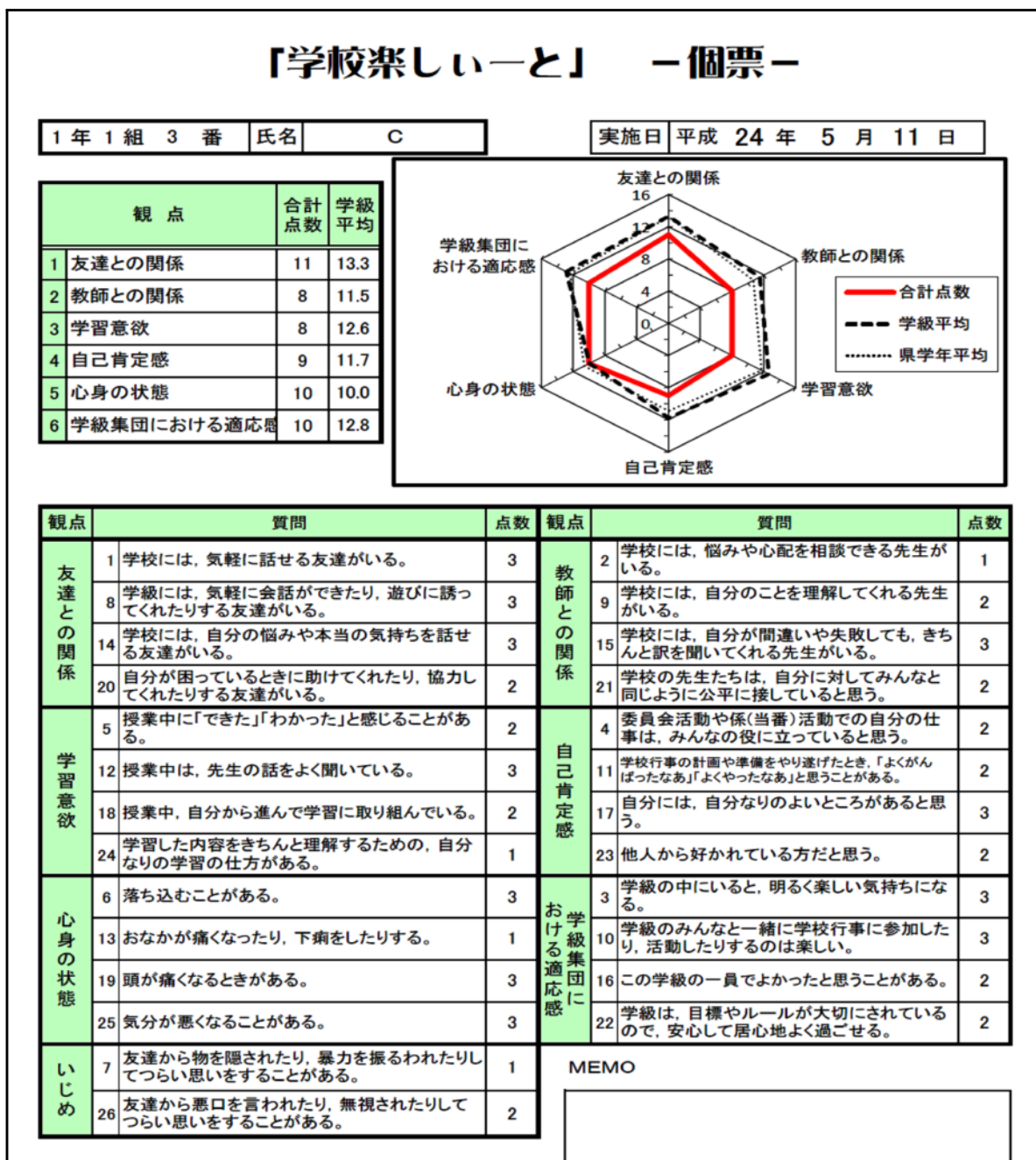


図7 「学校楽しいーと」の個票

さらに6観点の質問項目を見ると、児童生徒の状態をより詳細に把握することができる。数値の低い部分に着目しがちになるが、児童生徒の「よさ」「強み」を発見することが、指導・援助につながる。レーダーチャートや各項目から見取ったこと、気付いたこと、日常の観察との違いや他の教師からの情報など、気になることをMEMO欄に書き込むことで事後の指導・援助に生かすことができる。また、本県は1学年1学級という小規模校が多い。そこで、県平均が表示されていることにより、小規模校でも当該学年の特徴や傾向について把握できるように工夫した。

2 実態調査の概要

(1) 調査の目的

「自己指導能力の育成に向けた生徒指導の在り方」について、研究の基礎資料とするため、「学校楽しいーと」を用いた質問紙調査を実施し、「学校楽しいーと」を構成する各観点について分布、平均値を示す。

(2) 調査対象

全県下公立の小学校，中学校，高等学校(平成23年度現在)，それぞれの約5%以上に当たる学校について，学校規模を考慮して抽出した(表2)。

表2 調査対象の内訳

区分	小学校	中学校	高等学校	合計
調査対象校(5%以上)	34校	16校	5校	55校
調査対象者数(5%以上)	6,617人	3,141人	3,050人	12,808人

(3) 調査期間

平成23年11月から12月までの2か月間

3 実態調査の分析結果と考察

(1) 分析結果1

表3と図8は，「学校楽しいーと」の各観点の学年別平均値と小学1年生から高校3年生の6観点の平均を表とグラフに表したものである。

中央値を8ポイントとするとそれ以上のポイントであれば良好と言える。高校2，3年生の「心身の状態」がやや低いポイントであるが，いずれの観点も良好な状態である。ただし，学年が上がるにつれ，6観点の適応感は低下していく傾向にある。

また，「友達との関係」，「学級集団における適応感」は，全学年とも他の観点に比べ，高いポイントとなっている。

表3 6観点の各学年における平均(単位：ポイント)

区分	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における適応感
小1	13.4	12.2	13.3	12.3	11.3	14.0
小2	13.4	12.0	13.4	11.7	11.4	13.9
小3	13.3	11.6	12.7	11.2	11.1	13.7
小4	13.3	11.8	12.1	10.8	10.9	13.0
小5	13.4	11.8	12.1	10.8	11.1	13.0
小6	13.4	11.4	11.9	10.9	10.8	12.9
中1	13.2	10.7	11.7	10.9	10.6	12.4
中2	13.0	10.5	11.2	10.7	10.5	12.1
中3	12.9	10.6	11.4	10.6	10.4	12.2
高1	12.8	10.1	11.1	10.6	10.0	12.4
高2	12.6	10.2	10.9	10.4	9.7	11.9
高3	12.7	10.5	11.3	10.9	9.5	12.3

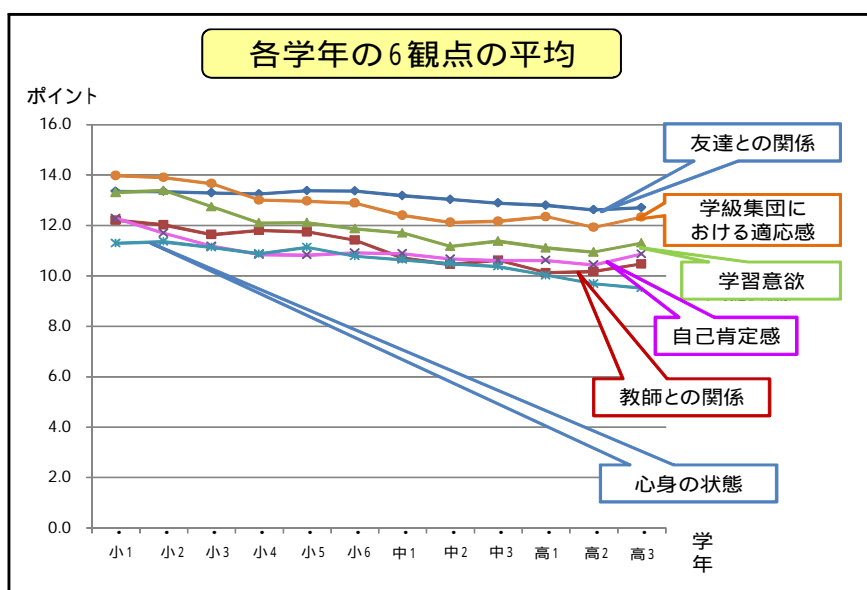


図8 6観点の各学年における平均

表4は、6観点の特徴的な傾向と対応策をまとめたものである。

表4 6観点の特徴的な傾向と対応策

6 観 点	特 徴 的 な 傾 向	対 応 策
友 達 と の 関 係	平均値を見ると全ての学年が3ポイント以上になっている。しかし、平均値は学年が上がるにつれて下降している。 分布を見ると、2ポイント以下の児童生徒が全学年に見られる。	教育相談を実施し、児童生徒の状況を把握する。人間関係づくりを積極的に進める。
教 師 と の 関 係	学年が上がるにつれて教師との関係が望ましくない方へ向かっている。 特に、学校接続時である小学6年生と中学1年生、中学3年生と高校1年生にかけての落ち込みが見られる。	児童生徒との日頃の会話や相談等のふれあいを通じて、信頼関係づくりに努める。
学 習 意 欲	小学校の低学年は75%の児童が望ましい状態にあるといえる。 小学3年生を機に、意欲的に取り組んでいる子どもの割合が急激に減っている。 一方、中学3年生と高校3年生の平均値が上がっている。	明確な学習に対する目的意識をもたせる。 分かる授業の取組を徹底する。
自 己 肯 定 感	学年が上がるにつれて望ましくない方へ向かっている。 また、小学校低学年は、特に分布のばらつきが大きい。 一方、高校3年生の平均値が上がっている。	児童生徒各人のよさに気付かせる援助を行う。
心 身 の 状 態	学年が上がるにつれて望ましくない方へ向かっている。 中学3年生から高校生にかけては、8ポイント以下の生徒が約25%いる。 他の観点到比べ、分布のばらつきが大きい。	ストレスを軽減する。 心のケアを積極的に行う。
学 級 集 団 に お け る 適 応 感	小学校低学年の分布に着目してみると、約80%が概ね満足している状況である。 他の観点到比べ良好な状態と言えるが、小学3年生から学年が上がるにつれて適応感が低下している。	規範意識の醸成を図る。 連帯感の育成を図る活動を行う。

さらに、学校によっては、入学してから卒業までクラス替えがないまま同じ集団で学校生活を送る児童生徒がいる。そのような場合、図9の実態調査から得られたヒストグラム（度数分布図）²⁾を参考に、児童生徒の得点と同学年の平均値、ヒストグラムと比較することで、状態をより客観的に捉えることができる。

6観点の特徴的な傾向を参考に、児童生徒の状態を多面的に捉えることが重要である。

なお、児童生徒の状態を「学校楽しいーと」の結果で把握するとき、8ポイント以下を見過ごしてはいけない。不適応を感じている児童生徒からのメッセージであると捉え、呼び出し相談など、即対応することが重要である。

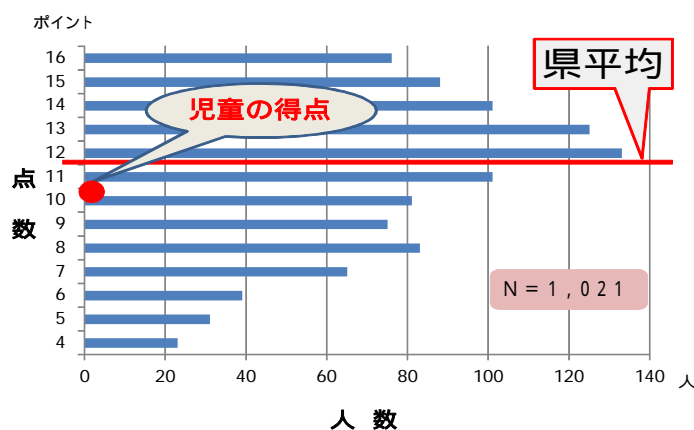


図9 ヒストグラム（小3「心身の状態」）

*2) ヒストグラム：全学年の各観点のヒストグラムは、鹿児島県総合教育センターWebページ(トップページ>カリキュラム>生徒指導)から見るることができる。

(2) 分析結果 2

学校規模（小規模，中規模，大規模）による相違，地域（鹿児島市とその他）による相違について分散分析を行った結果及び考察について，以下に述べる。

ア 小学校における地域，学校規模による相違

表 5 小学校における地域と学校規模による相違

区分	友達 関係	教師 関係	学習 意欲	自己 肯定	心身 状態	集団 適応
地域	-	-	-	-	-	-
規模			-		-	

：主効果あり（有意水準5%） - ：主効果なし

< 結果 >

- ・ 地域（鹿児島市，その他）の相違による適応感については，差が見られなかった。
- ・ 学校規模（小，中，大）の相違による適応感については，「友達との関係」，「教師との関係」，「自己肯定感」，「学級集団における適応感」において，有意差が見られた。

（表 5，図10）

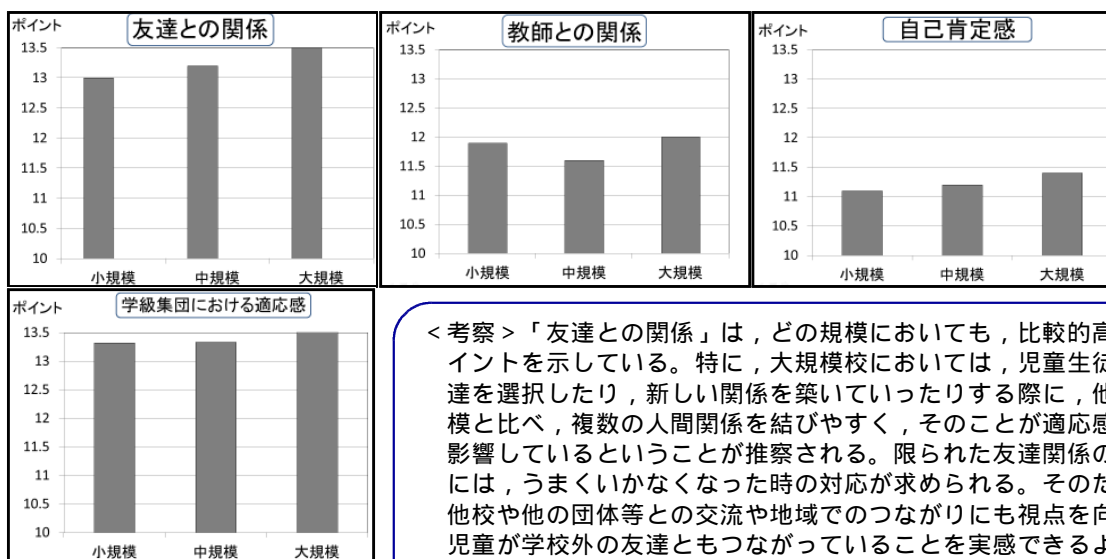


図10 学校規模の相違による適応感

< 考察 > 「友達との関係」は，どの規模においても，比較的高いポイントを示している。特に，大規模校においては，児童生徒が友達を選択したり，新しい関係を築いていったりする際に，他の規模と比べ，複数的人际关系を結びやすく，そのことが適応感にも影響しているということが推察される。限られた友達関係の場合には，うまくいかなかった時の対応が求められる。そのため，他校や他の団体等との交流や地域でのつながりにも視点を向け，児童が学校外の友達ともつながっていることを実感できるような場や学校内だけに限らず，他での所属感ももてるような機会が必要となってくることも考えられる。

イ 中学校における地域，学校規模による相違

表 6 中学校における地域と学校規模による相違

区分	友達 関係	教師 関係	学習 意欲	自己 肯定	心身 状態	集団 適応
地域	-	-	-	-		-
規模		-	-	-		-

：主効果あり（有意水準5%） - ：主効果なし

調査対象校には，鹿児島市内の中規模校がなかったため，中学校は，分析から中規模校を排除した。

< 結果 >

- ・ 地域（鹿児島市，その他）の相違による適応感については，「心身の状態」のみ有意差が見られた。
- ・ 学校規模（小，大）の相違による適応感については，「友達との関係」，「心身の状態」において，有意差が見られた。

（表 6，図11）

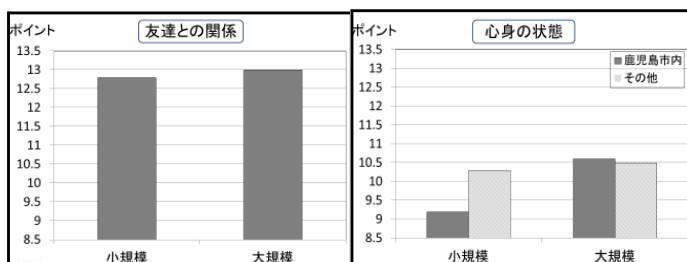


図11 学校規模の相違による適応感

< 考察 > 中学校における「心身の状態」は，地域と学校規模による相違が見られ，他の観点と比較しても低い状況にある。「心身の状態」は，調査時の状況（友達関係や周りの環境等）が特に影響する可能性がある。そのため，生徒の感情や考えを直接，聞くなど，注意深い観察とともに，早期に教育相談を実施し，関係する要因の把握や対応が求められる。